「日本一住みやすい釧路」

釧路あすなろクラブ第3部会から

―上―

19日付本紙16面コラムで永田敦子さんも取り上げた「日本一住みやすい釧路」という大胆宣言の発信元である、経済研修団体「釧路あすなろクラブ（福田紀幸会長、会員52人）第3部会発表があった5月例会の模様を2回でレポートする。発表の中に新しい地域の風を吹かせるヒントが隠されているかもしれない。

（木村啓司）

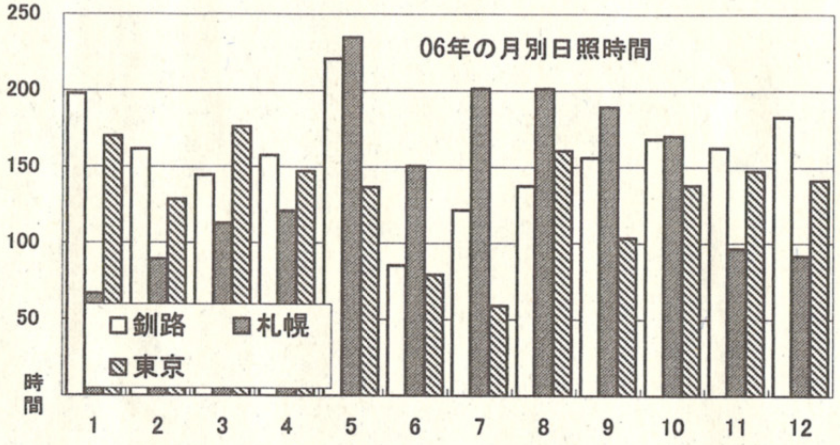
「釧路は日本一住みやすい」。一瞬耳を疑ってしまうフレーズだ。

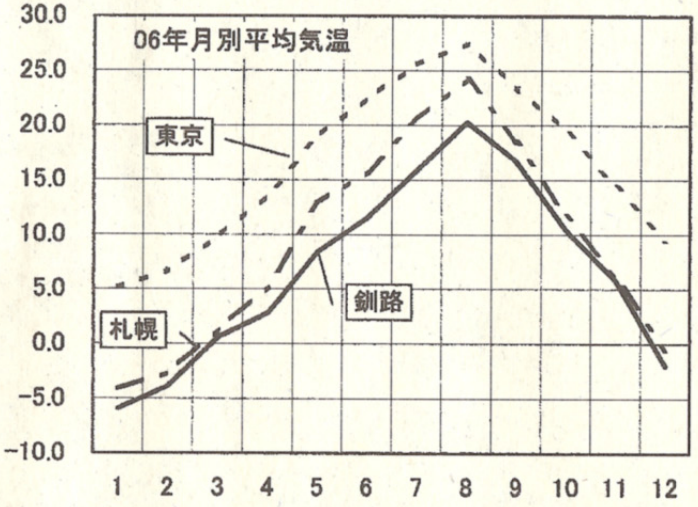
同クラブでは年間テーマを「発見、知見、想見、夢釧路」と掲げ、釧路の産業、資源などを再点検し、元気で夢のある釧路の姿を模索しており、このテーマに沿って同クラブ第3部会(及川雅順部会長)が自然など環境条件を根拠にしている。住民にとって釧路の気象に関する印象といえば、厄介（やっかい）ものの霧や、夏の低温などマイナス要素ばかりが浮かんでくるのが相場だが、実はこれが、際に真夏日のない釧路は「窓を閉め切っても寝苦しくないし、防犯上も望ましい環境」「冷房要らずで、涼しさこそが釧路の資産」などデータを根拠にたたみ掛ける。

〝涼しさこそ資産〟に

昨年の気象データが根拠

前段の宣言を披露した。ひとまず経済情勢やインフラなどには目をつぶり、2006年の気象データや





移住を考えているリタイヤ世代を道外から呼び込む好材料に転換できるというのだ。

発表では「霧の街・釧路」のイメージを覆すデータとして、年間日照時間を東京、札幌と比較している。夏の濃霧は他都市の群を抜く発生回数だが、日照時間は冬の晴天でばん回しており、実際には東京、札幌よりも太陽が照る時間は長い。

すかさず「夏に日が照らなければ寒かろう」という指摘がありそうだが、実

移住の地に北海道を選ぶ人は「暖」を求めていないともいえ、冷夏を後ろ向きにとらえる必要もない。暑い夏を欲している人は南国の離島など西日本を目指すだろう。むしろ同部会では「冷えた体は温泉で温めることができる」と、外側から見た釧路の良さを列挙している。